

知求会ニュース

2016年09月

第59号

◎ 教職員人事異動

小川由美子さん

2年3か月在籍されていた専門職員の小川さんが7月1日付で小山工業高等専門学校総務課へ異動されました。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。在職期間中は大変お疲れ様でした。後任には小山工業高等専門学校総務課から事務長補佐として中里正芳さんが着任されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第40号（平成28年7月20発行）6-7面に、「特集2 国際学部が変わります！」

平成29年4月国際社会学科と国際文化学科を国際学科に統合（設置構想中）」と題して、「国際学部で学ぶということー国際学部教員の座談会」の記事が掲載されました。
(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow40_6-7.pdf)

2. UUnow 第40号（平成28年7月20発行）9面に、Welcome to 研究室&ゼミ「国際学部 地域社会論Ⅰ 古村ゼミ」と題して、古村学先生と東野朱音さん（国際社会学科4年）、島袋雄仁さん（国際社会学科4年）、島津爽穂さん（国際社会学科4年）、村里俊光さん（国際文化学科4年）、豊後駿さん（国際社会学科4年）らのコメントが掲載されました。

(http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow40_8-9.pdf)

3. UUnow第40号（平成28年7月20発行）3面に、OB.OG.INTERVIEW「答えのない世界に立ち向かう」と題して、伊勢万梨乃さん（国際学部4年）の「取材を終えて」のコメントが掲載されました。（http://www.utsunomiya-u.ac.jp/docs/uunow40_2-3.pdf）

4. キーデザイン（土橋優平 代表理事）が開設しているHPの中で、Worker's file 01に国際学部OGの田中えりさんのインタビュー記事が掲載されています。

(https://note.mu/workers_file/n/ndaa239029881)

5. キーデザイン（土橋優平 代表理事）が開設しているHPの中で、Worker's file 03に国際学部OBの岩井俊宗さんのインタビュー記事が掲載されています。

(https://note.mu/workers_file/n/n4a0a95dadf81)

6. 「悠悠手にしてほしい一冊」（宇都宮大学附属図書館発行 第24号 平成28年6月）に、松村史紀先生の推薦書が掲載されています。

『職業としての政治』：マックス・ウェーバー（脇圭平訳）著 岩波文庫 岩波書店 1984

7. 「悠悠手にしてほしい一冊」（宇都宮大学附属図書館発行 第25号 平成28年8月）に、松金公正先生の推薦書が掲載されています。

台湾とは何か：野嶋剛著 ちくま新書 筑摩書房 2016

※「悠悠手にしてほしい一冊」は宇都宮大学附属図書館の学術情報リポジトリから見られます。
(<https://uuair.lib.utsunomiya-u.ac.jp/dspace/handle/10241/8839>)

◎ 放送大学面接授業（栃木学習センター主催）

1. 基礎から学ぶ中国語 10月29日（土）・30日（日）10：00～17：00
松金公正 国際学部教授
2. スペイン語入門 11月5日（土）・6日（日）10：00～17：00
スエヨシ アナ 国際学部准教授
3. 異文化交流のための英語活用法 2017年2月4日（土）・5日（日）10：00～17：00
アンドリュー・ニール・ライマン 国際学部准教授
4. 現代の国際政治 10月20日（木）・27日（木）・
11月10日（木）・17日（木）14：00～17：00
松村史紀 国際学部准教授
5. ヘンデルとイギリス文化 11月12日（土）・13日（日）10：00～17：00
高際澄雄 国際学部名誉教授
6. オセアニアの伝統と現代 12月10日（土）・17日（土）10：00～17：00
柄木田康之 国際学部教授

研究室訪問 46 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第46回は執筆者が未決定のため未掲載になります。

博士録 37 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第37回は執筆者が未決定のため未掲載になります。

知究人 30 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。今回は、国際学部阪本研究室 OB の堀部聖人さんをお願いしました。

「教員として世界を目指して」

堀部 聖人

宇都宮大学国際学部国際社会学科卒業生の堀部聖人です。高校生の時から「教育を通して国際協力に関わりたい」と思い、宇都宮大学では国際学部にも所属しながら中学校社会と高校公民の教員免許を取得しました。また、日本に住んでいる移民の子どもへの教育支援にも興味があり、夏休みの宿題のお手伝いのボランティアや在日外国人児童を対象とした進学説明会の通訳をしていました。JICA や UNICEF などの国際機関で働くには最低でも修士号が必要であり、さらに、「他国での移民の児童への支援の現状を見たい」という関心もあったため、海外で大学院への進学を決意しました。

現在はアメリカ中東部のインディアナ州エヴァンズビル市に位置する南インディアナ大学大学院教育学部高等教育課程で「アメリカ在住の日本人移民児童におけるアイデンティティの発達」について研究しております。具体的には、アメリカでの生活が日本人移民児童のアイデンティティの形成にどのような影響を与えているのかや日本人移民児童への母語教育とアイデンティティの形成がどのように関係しているかといったことを研究しているところです。さらに言えば、この留学プログラムは毎週土曜日に南インディアナ補習校で講師をしながら、平日は南インディアナ大学で勉強するものであり、私の研究では南インディアナ補習校で勉強している児童を主に対象としています。

アメリカでは母語教育の一環として補習校制度が充実しています。南インディアナ補習校もその一つであり、今年度は小学生から高校生まで 60 名ほど在籍しております。私は高校 1 年生と高校 2 年生の英語、中学 3 年生の公民を教えています。生徒の中にはアメリカに長期間滞在している子も多く、英語の方が日本語よりも話しやすいという子も少なくありません。以前大学の授業でアイデンティティについて生徒をインタビューしましたが、南インディアナ補習校の生徒は自分が日本人であるかアメリカ人であるかはっきりとわからないと答える子が多かったです。また、何名かの児童は、アメリカ人と接していると自分は日本人だと感じる一方で、日本にいる日本人と接していると自分が外国人のように感じると答えていました。

私自身も帰国子女であり、思春期にアイデンティティの葛藤で苦しんだものとして、私の研究がアメリカに住んでいる日本人児童生徒のアイデンティティ形成の研究の発展につながることを期待し、毎日勉学に励んでいます。これからも補習校の先生として教えながら、生徒からもたくさん学んでいきたいと思います。

(国際学部 国際社会学科 第 17 期卒業生)

(2016 年 08 月 19 日原稿受理)

海外だより 22 第 27 号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

今回は友松研究室 OG の高木亜紀さんをお願いしました。

「タイだより」

高木 亜紀

みなさんこんにちは。

国際学研究科博士前期課程修了の高木亜紀です。現在タイの首都バンコクに住んでいます。こちらに来てしばらくは年中汗だくで季節がないじゃないか！と思っておりましたが、一年過ごしてみると、わずかながらの季節の変化を感じるようになりました。それでも暑く、日本のはっきりとした季節が恋しいと感じます。タイへ来たのは今回が 2 回目で一度目は 20 年ほど前になります。そのころのバンコクも成長期にあったので、開発はされていましたが、やはり途上国の首都という印象がありました。昨年、20 年ぶりにバンコクにきまし

たが、高層ビルやデパートが多く、流行のものに囲まれて、東京に勝るとも劣らない大都市に様変わりしており、学校へ通う子供たちや街ゆく人々の持ち物や様子を見てもとても豊かな印象を受けました。多くの外国人がトロピカル気候で豊かな食文化、異国情緒のあるバンコクに来るのも納得します。その反面、地方との格差は大きいと感じます。

私は言語聴覚士です。日本では病院でコミュニケーション障害者のリハビリテーションを行っていました。現在、JICA シニアボランティアとしてタイの首都、バンコクにあるマヒドン大学ラマティボディ病院医学部コミュニケーション障害科学学科で活動しています。コミュニケーション障害学というのは日本でもそうですが、タイでもマイナーな学問であり、マヒドン大学にしかコミュニケーション障害学を学べる言語聴覚養成課程がありません。こちらでコミュニケーション障害はアメリカ同様、**Speech pathology** と **Audiology** に分かれています。ここで学んだ学生たちがタイで働く **Speech therapist** と **Audiologist** になります。タイでは **Speech therapist** と **Audiologist** と合わせても 300 名に満たず、特に首都や都市部に集中しているため、地方では一人も居ない県も存在しています。そのようなタイでの私の主な活動内容は大学の学部生への講義と臨床実習の指導、そして、院生の修士論文の指導です。学生の講義では、小児から成人の言語検査の紹介や、言語訓練の方法などを指導しています。こちらの大学は日本の大学と変わらない設備が揃っており、専門的な授業を受けることができます。タイ語で書かれた言語障害分野の教科書が少ないため、学部生でも英語の教科書を読み、学生発表のプレゼンテーションの資料も英語で作成します。私の授業は英語で行っていますが、彼らはほとんど理解できているようです。臨床実習では、学生と施設へ行き、障害児の言語評価と訓練を一緒に行っています。タイ語は日本語とは違うため、日本語での指導法をそのまま紹介することはできませんが、現地の訓練法に追加できることがあればアドバイスをしています。また、学科では地方のコミュニティ活動や、巡回リハビリ、PTOT など他職種との連携について学ぶことがないため、講義に取り入れています。バンコクの医療水準は高く、外国人向けの医療ツーリズムが盛んです。多くの外国人が、特に中近東やアジアの富裕層がメディカルチェックのためにタイに訪れています。このように、バンコクでの医療サービスは充実していますが、地方ではリハビリを受けることができるのは皆無です。命を助ける最低限の医療は受けることができますが、その後のケアや維持、または予防のためのリハビリまでは当事者だけでなく、医療従事者自身もまだ目が向かないようです。そして、コミュニケーション障害というのは実際に目に見えない障害であり、本来、ニーズがあっても別の障害に目が向き十分対応ができていないのが現状です。ここで学ぶほとんどの学生はバンコクあるいは、大都市で働くことになります。この職種でのポジションは大都市の病院にしかないのです。そのような格差を埋めるために何ができるか、多くの学生や先生方に現状を知ってもらい、興味を持って考えていただきたいと思っています。あと残り 8 ヶ月ほどの任期ですが、引き続きタイのコミュニケーション障害者に関わる人材育成のお手伝いをしていきたいと思っています。

(国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻 第7期修了生)

(2016年07月21日原稿受理)

海外留学今昔 18 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

「ベトナムという国で」

国際学部国際社会学科4年 里中 彩

今、ベトナムで過ごした半年を振り返ると、なんて刺激的な時間だったのだろうか、と思います。授業の雰囲気、東南アジア独特の風に吹かれて過ごす毎日の生活は日本のものとはかけ離れており、物や人が雑多に溢れる路地を歩くだけでも発見ばかりの日々でした。

ハノイ大学での授業の内容は国際関係学や、開発経済学などどれも興味深いものでした。留学先をベトナムに決めた一つの理由が、「途上国の発展や開発について現地の人々はどう考えているのか。」を肌で感じ学びたいという思いだったため、授業の中で同世代の学生が感じていることを聞くことができ刺激となりました。授業では毎回ディスカッションやプレゼンテーションがあり、またクラスでの留学生が私一人だったことから発言の機会を多く与えてもらうなど、授業の参加姿勢は必然的に積極的なものになりました。席は最前列に座るようにしていましたし、わからないことがあれば授業の終わりに教授に質問に行くなど、周りの学生に語学も知識もおいていかれないように努力するなど、ただただ必死に取り組みました。グループワークなどで周りとのコミュニケーションがうまくとれず悩んだこともありましたが、そういう時は放課後一緒にベトナムコーヒーを飲んで話し合いました。良くも悪くも楽観的な私の性格は、ベトナムで大きなストレスを抱えることなく生活するのに適していたと思います。ベトナム人の持つ真面目さとお気楽さの、絶妙なバランスが私には心地よかったです。

ハノイ大学の近くではモノレールの建設工事をしています。ホーチミン市でも地下鉄が2020年に開通する予定です。一方で、道路には溢れんばかりのバイクに排気ガスを少しでも吸うまいとマスクをした人々が乗り走っています。北部の少数民族の村には観光客に商品を売る児童がいます。一方、都市部の裕福な家庭の子どもは塾へ通い、中国やアメリカへの留学を夢見ています。大学の授業で教授は政府の批判は決して行いません。これからますます発展していくであろうベトナムに住み、貧困、経済格差、環境汚染、発言の自由などの深刻な社会問題を目にし、実感しました。国際協力を学ぶ一人の学生として、これからのベトナムの発展の先に手放しで喜べるような明るい未来だけが待っているわけではなく、課題も多く残されていると感じます。留学を通じ、現地の人と同じものを食べて暮らすことにより、日本で学ぶことはできない感覚を得ることができました。私にとって留学することが、机の上だけでなく人の目線になり、社会を見つめ直し考える機会でした。

宇都宮大学からベトナムのハノイ大学への交換留学生の派遣は私が初めてで、手続き全てが手探りでした。そんな中で大きな助けになってくれたのが、宇都宮大学にハノイ大学から交換留学生として来ていたベトナム人学生でした。住む場所の確保、アルバイトの紹介、ベトナム語のレッスンなど、不安を抱えていた生活の面で大きく支えてくれました。そして最後になりましたが、留学に際して援助や助言をして下さった先生方や友人にも感謝申し上げます。私の体験が、留学を考えている方の参考になればと思います。

(国際学部 国際社会学科 第4年次在学学生)

(2016年08月26日原稿受理)

「ベトナム留学体験記」

国際学部 国際文化学科4年 椎名 毬子

私の留学生活は苦い思いも沢山して、決して楽しいことばかりでは無かったと思う。それでも一生この6ヶ月を惜しまないと思えるのは、それ程日本には知ることがなかったであろう文化、環境、人々に触れ、かけがえのない経験ができたからだ。

ベトナムといえば東南アジアの中でも著しい発達を遂げている国として有名である。日本でぬくぬくと育った私は、バイクの量や異様な熱気など、様々なベトナム独特のエネルギーに、到着早々圧倒されたことを覚えている。

私の留学したハノイ大学はベトナムの中でもトップクラスの大学であり、また進学率がそこまで高く無いベトナムで大学まで進学してきた学生は、モチベーションもポテンシャルも高かった。そんな中日本人たった1人、常に意見を求められ、プレッシャーに押しつぶされそうになることもあった。授業は英語能力に限らず、環境問題等社会で何が起きているかを把握し、自分の意見に落とし込む総合力を求められ、刺激を受ける日々であった。そして普段から考えることに慣れること、英語で即席で意見をまとめ、シェアする機会はとても貴重な経験になったと思う。どれだけ難しくても6か月ベトナム人と勉強できたことは自信になり、がむしゃらに生活した6か月は恐ろしく早かった。

勉強面以外は、ベトナム人の陽気な国民性に沢山触れた。教室はお喋りなベトナム人で常に賑やかだった。授業のない日にはご飯を食べに一緒に出かけ、金曜夜には友達のバイクの後ろに乗って街へ繰り出した。何事にも興味津津、家族、目上の人をいつも敬い勉強熱心な彼らのことは大好きだし、尊敬している。一方人の部屋に勝手に入ったりと、どうにも遠慮がないところや、惜しい！と感じる場面もたくさんあり、異文化経験を通して異文化理解の難しさも感じた。

英語の勉強が一番の目的で、次いで、東南アジアでも著しい成長を誇るベトナムのエネルギーに触れたいと思い、決意した留学だった。日本に帰ってきて、毎日話していた英語は自然と使わなくなり、テレビでバイクの溢れるベトナムの道路を見ると、よくこの道路を日常的に渡っていたなあとも思う。留学という経験はそれだけ私の日常生活とは異なったものだった。「百聞は一見にしかず」というが正にその通りで、留学前にどれだけ下調べや事前準備

備をしても、それを上回る出来事や、本やインターネットに載っていない事の方が多かった。実際見て経験して、私の場合住んで一緒に生活をして知った事は多く、それは私の考え方や視野を広げてくれたし、人生観をも変えてくれたのではないかと思う。私は以前より自分が臆病ではなくなったと思うし、留学前よりも今の自分が好きだと思えることが、一番の留学の成果だと思う。

最後に私の留学を支えて下さった先生、家族、友人たちに心から感謝し、留学を迷う学生がいるなら、私の経験が少しでも一歩を踏み出すきっかけになればと思う。

(国際学部 国際文化学科 第4年次在学学生)

(2016年08月19日原稿受理)

学生サロン10 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。第10回は執筆者が未決定のため未掲載になります。

キャリア指南12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPOや企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。第12回は執筆者が未決定のため未掲載になります。

フォーラム 2016年の長月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)今回は田巻研究室OBの**仲田和正**さんと重田研究室OBの**茂樹勉**さんに寄稿をお願いしました。

Congratulations on Dean Tamaki's 60th Birthday
Private Lounge
July 9th 2016 (18:00~21:00)

仲田 和正

田巻ゼミの学部生、院生、OB & OGの有志によって、先生の還暦を祝うパーティー開催に向けた準備作業が秘密裏に、約2か月間を要して進められた。「還暦」という言葉は、できるだけ用いないよう申し合わせを行い、「Congratulations on Dean Tamaki's 60th Birthday」というタイトルになった。

開催日に関しては、家族や大学関係者から田巻先生のスケジュールに関する情報収集を行い、日程調整をして7月9日(誕生日7月14日)に決定した。

パーティー会場は、参加人数に応じて選択できるよう、レストラン、ホテル、公共施設、パーティー専用施設などをリストアップし、実際に訪れて担当者と多岐にわたり交渉を重ねた結果、最終的に条件(会場の使用時間、会場レイアウトの変更、会場内にディスプレイ可、料理・飲み物の種類、予算、収容人数、パソコン・オーディオ機器使用可、演奏

可、シャンパンタワー、誕生ケーキの手配、受付用デスク・案内板の設置など）を満たすプライベート・ラウンジに決定した。

誕生パーティー当日は、17：30分に担当者が田巻先生宅へお迎えに伺い、行先も何も告げずほぼ沈黙のまま約20分後に会場へ到着、予め待ち構えていた教え子たち（49名）の熱烈な歓迎を受ける。

Dean Tamaki's 60th Birthday Celebration は、先生とゼミ生によってシャンパンが積み上げられたシャンパングラスに注がれて開演し、続いて学部生、院生、社会人代表からそれぞれ祝辞が贈られ、国内外から届いた祝電などが紹介された。宴もたけなわとなったところで、あらかじめ収集したお祝いのメッセージやインタビュー収録を編集したサプライズ動画の「田巻は何を語るか」を上映した。田巻先生の著書「夕張は何を語るか」をデフォルトメして、新たな写真とタイトルを貼り合わせて「田巻は何を語るか」を製作した。

サプライズ動画は、序章：先生の顔を挿入したハイハイする赤ちゃんの画像で始まる映像に会場は大爆笑となる、第1章 田巻松雄とは、第2章 大学と田巻化、第3章 越境する田巻、第4章 田巻への批判で構成され、ゼミ生が研究資料室に入室して本棚の「田巻は何を語るか」を手にするところからカメラが追いかける、ドキュメンタリータッチの映像となっている。サプライズ動画は、先生と家族を綴ったエピソード写真や、先生と教え子たちとの懐かしい写真、教え子たちから寄せられた近況の写真や映像、さらに、参加できなかった多くの人々（居酒屋の大将、他50名以上）やベトナム、フィリピン、ドイツ、アメリカなどから寄せられたメッセージや動画が紹介され、最後に恩師の駒井先生からボイスメッセージの祝辞が贈られたところでページが閉じられ、ゼミ生が研究資料室へ本を返却したところで拍手喝采となった。

サプライズ動画に負けないサプライズが、田巻松雄ライブステージの開演であった。駒井先生から学生時代に指から血を流すほどギターを弾いて、歌っていたエピソードをお聞きしていたので、約一か月前に当日の演奏をお願いし、快諾（無理矢理）を得ていた。マイクのセッティングやギターの搬入など、ステージの準備段階からゲスト出演がいるかのように装いながら、先生の酒量が進む前に本番を迎えた。

田巻オンステージは、大歓声に包まれるなか川島英吾の「時代おくれ」で始まり、「黒舟歌」、最後に「シクラメンのかおり」をしっとり歌い上げて盃に手を伸ばした。アンコールの拍手は鳴りやまず、参加者も大いに感激していたようなので、サプライズ企画として大成功であったと思われる。

その後、抽選会の当選者に先生の著書を贈呈、酒を酌み交わしながら歓談、花束贈呈、学部生、院生、社会人からそれぞれ誕生日プレゼントが送られ、最後は、会場の外に出て全員で記念写真を撮って散会となった。田巻先生は、ほろ酔い顔に笑みを浮かべ何も語らず担当者に自宅まで送られ、教え子たちは、それぞれ REUNION の会場へと向かった。

（国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻 第3期修了生・
博士後期課程 国際学研究専攻 第3期在学学生）

(2016 年 07 月 30 日原稿受理)

「近況報告」

茂櫛 勉

今夏はリオオリンピックに先立ち、ロシアが国をあげてドーピングをしたとして話題となった。そのロシア、ウリヤノフスク市で私は 1999 年秋、宇都宮市青年局と合同で麻薬とエイズ防止の特定非営利活動団体を立ち上げた。目標は「青少年健全育成センター」を建設すること。モスクワ建築大学や現地の不動産、大学、医療関係者と協議を重ねた。隣国フィンランドの政府関係機関にも協力関係を要請した。また地元の企業や、日本財団、英国の国際支援団体などに経済的支援を募った。

2007 年 4 月、日本における「寄付文化」形成を含む市民社会形成を研究するため、私は宇都宮大学大学院国際学研究科へ入学し、重田康博教授に師事した。先生の NGO 研究成果は天才的で、私は在院中に NGO の基礎を叩き込まれた。論文執筆は地元のホテルで正社員として働きながらだったが、おかげで完結した。新卒生のようなマインドセットで、NGO 論議に花を咲かせた。

国際的に多彩な同期生の中には、現在博士後期課程に在籍する根本女史がいた。修了後も年次の重田ゼミ研究会を通してお付き合いいただいている。このお二人は数年前私が転職した際に一緒にランチし、即座に悩みに耳を傾け励ましてくれた。心温まる方々だ。

その重田ゼミ研究会だが本年は 5 月 15 日に UU プラザで開かれた。ゼミの OB と現役生に呼びかけ、出席者のうち 3、4 名が発表を行なう。その後今年は、先生の還暦祝を兼ねた夕食会で各自が近況報告した。別れ際来年の日程を決めて解散という流れだ。まだ小規模だがいつか、“地球市民社会の夜明けは近づいた！”と力強く宣言するのだろうか？

私はといえば、昨年『ロシアの街角で出会った人々』（文芸社、ジャンル海外旅行）を出版した。大学の図書館に蔵書があるので拾い読みしていただければ幸いだ。年末にプーチン氏の来日を控えている。一助にはなる。書き下ろしたままの備忘録だったのが急に出版の運びとなり、急ぎ数回読み返した。そこにはロシア正教の果たす役割のことを繰り返し述べていた—私自身驚いた。その‘正教’（「オーソドックス」とも言う）は現在、税金や布施といった手段ではなく自力で資金を蓄積させていっている(*)。彼らの狙いはもちろん国教化だ。が、千年の間に国民の 6 割以上を信徒にした手腕は老練だ。時の政権が推し進める資源戦略とともに今後注視してほしい。

*参考文献 宮川真一『ロシアの「国民正教」』スラヴァ書房 2015

(国際学研究科 博士前期課程 国際交流研究専攻 第 4 期修了生)

(2016 年 08 月 18 日原稿受理)

特別寄稿

「国際学部同窓会懇親会報告」

同窓会では、2016年4月29日（土）に宇都宮市にて同窓会理事会および学部先生方との意見交換会を行い、その後懇親会を開催しました。学部先生方との意見交換会には田巻松雄学部長と重田康博先生が参加され、2017年4月に予定されている国際学部改組や多文化公共圏センターの今後の活動、インターンシップの実施状況などについてうかがい、同窓会として協力できることについて、いろいろお話しすることができました。

また、意見交換会に先立ち行われた理事会では、本年11月19日（土）に予定されているホームカミングデイ並びに同窓会総会についての準備を行いました。峰が丘祭と同時に開催される隔年実施のホームカミングデイは今回で4回目を迎えます。前回は国際学部創設20周年記念という節目の時期となり、多くの同窓生や懐かしい先生方が集まりました。今回、国際学部では学部改組を中心としたシンポジウムが行われる予定です。国際学部の今後について同窓生の皆さんからもご意見がうかがえればと思いますので、ぜひご参加ください。またホームカミングデイに合わせて同窓会総会も開催いたしますので、こちらにもぜひご参加ください。

さらに同日夜には、宇都宮駅前で懇親会を開催しました。懇親会には、田巻先生と佐々木一隆先生が参加してくださり、理事会からは吉葉会長を含む5名、さらに国際学研究科同窓生3名、学部同窓生4名の計14名の皆さんにお集まりいただきました。私個人としては卒業以来会っていなかった友人に会うことができ、近況を報告しあい、大変楽しいひと時を過ごすことができました。

同窓会の懇親会は、今後も可能なかぎりさまざまな場所で開催していきたいと考えております。「今度ここで懇親会をします」「ここで懇親会をしてほしい」などの要望がありましたら、ぜひご一報いただければと思います。

（国際学部 国際社会学科 第1期卒業生）

（2016年08月5日原稿受理）

●お知らせ

来る2016年11月19日（土曜日）に、第4回ホームカミングデイが開催されます。国際学部の企画案は次のとおりです。シンポジウムは、「新国際学部が目指すもの（仮題）」として 第一部 基調講演（田巻学部長） 第二部 パネルディスカッションの構成を考えているようです。第二部のパネリストとして、各同窓会から1名、他には、宇都宮大学経営協議会から1名、栃木県高等学校校長会から1名、学生2名を予定しています。同窓会からのパネリストは現在、人選中です。では、多くの同窓生の参集をお待ちしています。最新情報は、宇都宮大学 HP のホームカミングデーのバナー（右側ほぼ真ん中）をクリックしてください。（<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/graduate/homecomingday.php>）

EU 支部だより

第 38 号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会 EU 支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の 19 号の内容は、1 イタリア 700 店賛同 名物パスタ食べて地震支援を世界にも呼び掛け 2 EU 支部だより ー食べて支援 Eat for Italyーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

●第 31 回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）が無事終了し、9 月 7 日から 18 日まで開催のリオ 2016 パラリンピック競技大会を残すのみとなりました。今大会は過去最高の 41 個というメダル獲得でした。内訳は金 12 個、銀 8 個、銅 21 個でした。編集者が一番記憶に残った金は、地元栃木県小山市出身の萩野公介選手と体操個人総合 2 連覇と体操団体総合の内村航平選手でした。この 2 選手については、8 月 23 日放映の NHK 総合テレビの NHK スペシャル番組「金メダル 知られざる闘い～内村航平と萩野公介～」で、舞台裏を紹介していました。

公益財団法人日本オリンピック委員会 (<http://www.joc.or.jp/>)

日本パラリンピック委員会 (<http://www.jsad.or.jp/paralympic/>)

NHK (<http://www6.nhk.or.jp/special/backnumber/index.html>)

●今年の NHK 甲子園 第 98 回全国高校野球選手権はすっかり第 31 回オリンピック競技大会（2016/リオデジャネイロ）の影響で影が薄かったかもしれません。そんな中で、地元宇都宮市にある作新学院高等学校が 54 年ぶり 2 度目の夏の全国制覇を果たしました。

<http://www9.nhk.or.jp/koushien/>

●バトミントンの奥原選手のラケットはスポーツメーカー・ミズノが開発した「奥原モデル」でした。アスリートだけではなく、スポーツ器具の開発やサポートスタッフの力、サポート施設「JOC G-Road Station」などが大きいことを示しています。

●ところで、読者の皆様は「オリンピック芸術展」をご存知でしょうか。オリンピック憲章第 31 条および第 54 条の規定で、組織委員会は「競技大会の必須の一要素」として芸術展をおこなわなければならないとされているようです。あまり報道がなされていないので、編集者は今回のリオオリンピックにおける芸術展について大変興味があるところです。

編集後記：2010 年 4 月 26 日から **知求会ニュースのバックナンバー**は 国際学部同窓会 HP

(<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 chikyukai@freeml.com

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会